

<紹介>

「京都産業学センターの 10 年を振り返る」

龍谷大学経営学部教授

重本 直利

10 周年記念行事ということで、このセンターの 10 年を簡単に振り返ります。時間が限られていますので、パワーポイントを使って、限定された範囲内で 10 年を振り返ってみたいと思います。抜けているところがあるかと思いますが、ご容赦下さい。

1. 京都産業学事始め

まず、パワーポイントでの書面の字は小さいので読み難いですが、京都産業学の始まりということになる北澤康男先生のレジュメです。レジュメはこの後続きます。「北澤ペーパー」というように呼んでもよいかと思います。この北澤先生のペーパーが 2000 年の 3 月 16 日付けから始まっています。このことは、北澤先生が中小企業の専門家ということでもあり、今後、京都産業学を創っていく上で、その内容の議論に入ることから、政岡光宏先生が北澤先生に依頼をされました。私もそこに参加して、北澤先生、政岡先生、重本の 3 名の会合を経営学部長室で 10 回ほど続けられました。これは、その最初の記念すべきペーパーです。これは門外不出のペーパーでして誰にも見せないということでした。京都産業学およびそのセンターは、この 2000 年 3 月 16 日から具体的の中身の検討が始まるのです。このセンターは 2002 年 4 月 1 日開設ですから、その 2 年ほど前ということになります。この内容は、小さくて読めないのですが、門外不出ですのでご了解いただきたいと思います。

このペーパーの最初のところですが、「おぼろ月夜の星くず」という、これは北澤先生流の表現なのですが、こういうかたちでペーパーが毎回出されていくことになります。このペーパーの最初のところで、京都産業学があれば、東京産業学、大阪産業学なども成立すると書かれています。京都産業は、確かに一個別地域の産業ですが、その独自の内容こそが重要であるというこ

とです。

この最初のペーパーのところで、北澤先生は図を書いておられます。ここに重要な言葉があります。「京都」とは経営主体あるいは経営能力が有効な経営資源と認識するという位置づけです。このペーパーは「星くず」と書いておられますが、非常に奥が深い内容で、かつ非常に重厚な感じのペーパーです。北澤先生としては気合を入れて毎回準備されておられたと推察します。この「経営主体とその能力」ということから「京都」を捉えていこうということです。「京都」概念の位置づけかと思います。これまでになかった方法論と言えます。通常の産業論や企業論とは違うアプローチです。図も描かれて説明をされておられます。

5回目の会合のペーパーをとり上げます。ここではじめて研究対象の企業名が出てきます。A、B、C、D、Eのグループに分けて出てきます。これは優先順位ではなくて、企業の特性も含めた一定の括りで5つに分けられています。例えば、島津製作所はBの括りのところに入ります。こういうかたちで整理をされて、ここから研究対象企業を絞っていこうという議論を5回目のところで行ったのです。ロビンソンの“*The Structure of Competitive Industry*”にふれられていますが、これも含めて議論していたということですから、3人で議論していたのですから、限られた議論かもしれませんが、様々な角度から議論をやっていたわけです。このペーパーには「北ジジー」という表記になっています。これも北澤先生独特の表現です。また、『『京都産業学』解体新書』という表現も使われています。いわゆる杉田玄白の『解体新書』の初版本（1774年）が龍谷大学の大宮図書館にあります。これは産業学の「解体新書」だということでした。

2. センター開設に向けて

次に、京都産業学は、京都にある企業に対して一切の先入観、偏見を捨てて見ていこう・明らかにしていこうとする試みだという点です。「どのように京都にあるか」ということを非常に強調しているペーパーです。北澤先生からの非常に内容の濃い・深いものだったと思います。それがあったからこそ、この後の「開設趣意書」につながっていくということになります。最初

の議論から 1 年半経った 2001 年 8 月に「開設趣意書」が書かれます。その際、小委員会が設置されて趣意書がまとめられました。この次の年の 2002 年の 4 月 1 日にセンターは開設されます。なお、開設にあたっては、当面、センター活動が安定するまで大学院経営学研究科の付置機関とすることになりました。全学センターは今後の検討となりました。

開設後すぐの 2002 年 4 月 17 日付けですが、学長宛への報告で共同研究の対象企業が挙げられています。何故、対象企業を学長に報告したのかという点ですが、この京都産業学センターの活動の内容理解をしてもらう必要があったことと、当初は全学センターとしての位置づけもあったからです。また、当時、このセンターの議論は、ロー・スクールの議論と平行に行われていました。全学的にも重要だということで、部局長会にも直接出かけて説明を行いました。先行研究の 3 社はイシダと福田金属箔粉工業と写真化学でした。こうした検討には、北澤先生、政岡先生がいて、原光世先生が当時の大学院の研究科長として関わっておられました。当面の対象企業は決まりました。これに合わせて、次期に取り上げる 4 社とその後に予定されている 14 社も取り上げられています。ただ、対象企業は、今後、変わるかもしれないということの了解もありました。対象企業の中には、三洋化成、川島織物もあり、大日本スクリーンも入っています。しかし、ここでの対象企業には島津製作所は入っていないのです。なぜ島津が入っていなかったのか。それは、大きな企業でもあり、さらに京都を代表する島津をとり上げるのは何か難しさ・重たさを感じたからではないかと私なりには推察しています。

こうした中、開設の 2002 年 4 月の段階で、本年度で 11 年目に入っています。経営者講義が準備されています。この講義は設立当初から始まります。最初の経営者講義のリストには、サムコインターナショナル社長の辻井理さん、島津製作所監査役の植田竜二さん、日本電気化学工業社長の小林祥一さんなど 12 名の経営者の方の名前が挙がっております。こうしたメンバーで最初の経営者講義が始まりました。その後、講師の経営者の方は入れ替わりますが、これが現在までずっと続いております。そして、ただ講義を行うだけでなく『経営者講義録』を毎年発行しています。10 年間にわたって経営者の方々の講義録を発行してきました。大学院教育などでの教材として使

われたりしています。なお、当時、この講義録を企業研究シリーズ（A）としました。シリーズ（A）は、その後のシリーズ（B）とか（C）が予定されていたのです。いまのところ（B）はブックレットということになるのかなと思います。今年度、島津製作所を対象としたブックレットが出るようですが、たぶんそれが実質的にはシリーズ（B）と言えます。

3. 京都産業人倶楽部の設置

話しは変わりますが。最初の京都産業人倶楽部は現学長室でした。学内で一番いい部屋を産業人倶楽部で使いたいという意向をもって設置場所の要請に望みました。管理課が作成した図面を見て下さい。これは、たまたま学長室が紫光館に移った一時期がありまして、竹田久保町の交差点の所にある建物です。あそこに本部が一時期移動しました。その移動の後、京都産業人倶楽部が、残された学長室を使うということになったのです。また、現在、事務局長室になっていますが、ここに京都産業学センターの事務室を置こうということになったのです。ここで京都産業人倶楽部が営まれることになります。一番いい部屋に企業の方々を呼んで、コミュニケーションを行うということでした。倶楽部はそれほどの位置づけであったということです。現在の倶楽部は8号館2階にあります。通常の大学の会議室等と違って少し倶楽部的な雰囲気ということで、調度品も、当時の経営学部教務課長がいろいろ努力してそろえてもらいました。こういう雰囲気の場合は学内ではなく、ここしかないのではないかと思います。こういうところで京都産業人倶楽部が今も営まれています。倶楽部内の書棚には書籍の他にもいろいろあり、一部ですけれど、陶磁器とか、友禅とかといった京都工芸の資料等も集めています。一部の工芸品も置いています。倶楽部の隣が産業学センターの事務室です。ここは単なる事務室ではなくて、京都産業学センターの重要な資料室もあり、それから共同研究プロジェクト室、京都町づくり経済振興研究会の事務局など、いろいろな活動を含めた事務室となっています。事務室にも書棚があります。また、客員研究員、リサーチ・アシスタント等のスペースもあります。

4. 様々な取り組み

最初のセンター紹介のパンフレットですが、これは先ほど皆さまにもコピーをお配りしましたが、2002 年開設にあたって作られた最初のパンフレットです。現在、在庫はありません。その後パンフレットはつくられていなかったので、これが唯一のセンターのパンフレットです。このパンフレットには、村田純一さん（当時、京都商工会議所会頭）からメッセージを寄せていただいています。この中で非常に重要な言葉をいくつかいただいています。例えば、「京都産業は伝統産業と先端産業の融合するところに独自の競争力を育んできたのではないのでしょうか」、「京都産業学センターは、『京都の 1200 年の歴史と企業とのかかわり合い』に特別の注意をはらい、それを切り口として、京都産業における独自の構造を明らかにしていこうとしています」といった内容です。京都産業学センターへの大きな期待が寄せられています。

先ほど少しふれましたブックレットは、現在、島津製作所を対象企業にして編集が進んでいます。ブックレットは 2002 年設立当初に刊行していく方針でした。10 年が経ってようやく目処が立ってきました。当初、ブックレット形式で 70 ページ前後ということでの公刊を含めて計画していました。

次に、今年は 10 周年ですが、3 周年記念として 2006 年 12 月に、設立 4 年目ですが記念シンポジウムを行いました。内容は、株式会社ウライの裏井紳介さん、京都銀行の京都総合経済研究所の中野勝二さん、タカラホールディングの細見吉郎さん、それから京都府知事の山田啓二さんに来ていただきました。

これまでのセンターの成果物として、設立以来、『京都産業学研究＜年報＞』を毎年出しています。編集委員会が中心になって頑張っており続けています。『京都産業学研究』は、アカデミックでもなく、また一般ビジネス書でもなく、その中間的な位置づけで企業の方にも読んでいただけるようなものにしようということで出発し編集されています。次に共同研究報告書です。共同研究員（学内および客員）が研究成果を出しています。その中には、京都市から龍谷大学京都産業学センターに委託され、2010 年 3 月に発行しました『新・京都産業政策プロジェクトに係る中小企業調査報告書』があります。アンケート調査、ヒアリング調査を含めて、京都産業学センターの中心的なメンバーが、京都市産業観光局、三菱 UFJ リサーチ&コン

「京都産業学センターの10年を振り返る」

サルティングの協力も得ながら作成した調査報告書です。それから、現センター長の細川孝先生が中心になって編集された『京都産業学を創る』です。これまでのセンターでの研究成果のまとめとして『京都産業学を創る』という書名で2011年2月に刊行され、一般書店にも置かれ流通しています。その他にも、共同研究プロジェクトの各報告書が発行されています。

5. 研究会と工芸人サロン

センター主催の京都産業学研究会は30回を数えています。また、工芸人サロンはこれまで18回開かれていています。京都を代表する工芸人の方に来ていただき講演をしていただいています。倶楽部内の書棚には、伝統工芸品の深草うちわ、伏見人形があります。ご講演に際して頂いたものを京都産業人倶楽部の中で展示しています。京都を代表する工芸人、“人間国宝”の方にも来ていただいて、お話をお聞きするということで「京都工芸人サロン」の活動を毎年2回程度行ってきました。

最後になりますが、『老舗の家訓』という本が倶楽部の中に置かれています。長い伝統のある京都企業には、何らかのかたちで、この“家訓”が生きています。あらためて、このことを、先ほどの村田純一会頭（当時）からのメッセージと合わせて読み取りたいと思います。1200年の京都の歴史の重みのなかで、京都企業の研究をし、その成果を国内外に京都産業学センターが発信をしていこうということでもあります。“老舗の家訓”という歴史の重みの現代的意味、その重要性を強調して、センターの10年を振り返る締めといたします。ありがとうございました。

○司会 どうもありがとうございました。私もあまり知らない歴史があつて、大変興味深く感じました。産業学センターは学内でもあまり認知度が高くないと言うと変ですが、10年、私も一定程度関わってきて、やはりいろんなことがあったのだなという思いを強くしております。

では、続きまして、基調講演ということで、二場邦彦先生の方から「地域産業の活性化と地域産業学の課題」ということでご講演を頂きます。では二場先生、よろしくお願い致します。